

Title	動物性食品を避ける行動と価値観の関係 : SDG s 推進のためのフレキシタリアン運動を目指して
Author(s)	
Citation	令和2 (2020) 年度学部学生による自主研究奨励事業 研究成果報告書
Issue Date	2021-04
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80631">https://hdl.handle.net/11094/80631</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 令和2年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふ り が な 氏 名	そう じゃくかん ZENG RUOHAN	学部 学科	人間科学部 人間科学科	学年	3 年				
ふりがな 共 同 研究者氏名	ちょう かうん 張嘉芸	学部 学科	人間科学部 人間科学科	学年	3 年				
	くお うえいしん 郭維昕		経済学部 経営学科		3 年				
アドバイザー教員 氏名	川端亮	所属	人間科学研究科						
研究課題名	動物性食品を避ける行動と価値観の関係——SDGs 推進のためのフレキシタリアン運動を目指して								
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。(先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。)								

## 目次

## 第 1 節 食を通じて持続可能な社会を作るには

## 1.1 背景

## 1.2 目的

## 1.3 研究計画

## 第 2 節 先行研究と仮説構築

## 2.1 定義

## 2.2 日本でベジタリアニズムが浸透してこなかった理由を模索した先行研究

## 2.3 仮説構築

## 第 3 節 質的調査結果①：名古屋ビーガングルメ祭り

## 3.1 フィールドワーク

## 3.2 ベジタリアン当事者へのインフォーマルインタビュー

## 第 4 節 質的調査結果②：ベジタリアン非当事者へのインタビュー

## 4.1 インタビューの概要

## 4.2 インタビューの結果

## 第 5 節 量的調査：非当事者へのインターネット調査

## 5.1 データの説明

## 5.2 アンケートの集計結果

## 5.3 自由回答のテキストマイニング

## 5.4 定量分析の方法

## 5.5 因子分析

## 5.6 重回帰分析とパス解析

## 5.7 量的調査結果の考察

## 第 6 節 考察：フレキシタリアン運動から SGD 達成へ

## 第 7 節 本稿の貢献と今後の展望

## 第 1 節 食を通じて持続可能な社会を作るには

### 1.1 背景

SDGs<sup>1</sup>を掲げた国際連合は、2019 年に発表した「持続可能な食文化を作る」というレポートで、気候変動を抑えるために畜産品の消費を減らすよう世界中に呼びかけた。その背景には、畜産から排出される温室効果ガスが、地球全体の温室効果ガスの 14.5%を(Gerber et al 2013)、更に家畜の消化管内発酵及び糞尿の処理、飼育場のための森林伐採、飼料の栽培などの合計として定義された「畜産」カテゴリーの温室効果ガス排出量が、農業部門総排出量の 80%以上も占めていることが調査により明らかになったことがある(Tubiello et al 2013)。

気候変動と食事選択の関係が明らかになり、政府及び民間において従来よりも畜産業のあり方、更には普段の食事選択に対して注目が集まった。この中で、昨今日本では大豆ミート及び代替肉を使用した新商品が、コンビニエンスストアなどで販売されるようになり話題を呼んでいる。また、観光庁がインバウンド対応のために作成した「飲食店等における外国人ベジタリアン・ヴィーガン対応ガイド」によると、2018 年間の訪日ベジタリアンは 145～190 万人で、その飲食費は年間 450 億円から 600 億円程度の規模だと推計されている。

しかし、注目されてきてはいるにも関わらず、日本ではベジタリアン文化が未だ浸透・定着していないのが現状である。そのため、ベジタリアニズムの普及による「持続可能な食文化を作る」試みを実現するまでの障害が多いことは想像に難くない。そこで、現状からかけ離れたベジタリアニズムを目指すよりも先に、柔軟で制限が少ないベジタリアンスタイルである「フレキシタリアズム」(「フレキシブル」と「ベジタリアニズム」に合わせた造語)から動物性食品を減らしていくことを提唱する、新たな食スタイルが誕生した。

日本において、歴史の浅いフレキシタリアニズムについての研究は必ずしも多いとはいえない。その一方、ベジタリアニズムに関する研究成果も蓄積されてはいるものの、まだ解明の余地がある分野だと考えられる。従来の先行研究では、日本人がベジタリアンになる要因を動物愛護意識に起因すると言及したものが多い。その他にも健康維持・宗教の影響を受けてベジタリアンになるという傾向に言及した研究も存在する。しかしながら、欧米のようにエコロジーの観点からベジタリアニズムを考察する研究は未だ行われていない(東山&小林 2016、角田 2011)。なお、栄養バランスに対する考え方がベジタリアリズムの実践を阻害する(角田 2011)ということも研究で示唆されている。しかし、現在に至るまでの研究は、ベジタリアン当事者にインタビューをする質的調査法で行われるものが多く、量的調査及びベジタリアン非当事者を対象とした研究は未だ少ない。このことから、日本におけるベジタリアニズムの現状は十分に説明できていないと考えるのが妥当であろう。

### 1.2 目的

以上を踏まえ、本稿では以下の二つを目的とする。一つ目は、日本でベジタリアン文化が現在まで浸透してこなかった理由を解明することである。二つ目は、日本で柔軟なベジタリアンを増やす「フレキシタリアン運動」の実現可能性及びその先に直面する課題を提示する。

<sup>1</sup> SGD<sup>s</sup>: 2015 年 9 月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」にて記載された 2030 年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標。

### 1.3 研究計画

研究の計画及び経過を以下に示す。研究期間は 2020 年 8 月から 12 月までで、参与観察、当事者へのインタビュー、非当事者へのインタビュー、パネル型インターネット調査の実施、アンケートの自由回答項目のテキストマイニング、量的データの解析を行った。まず、研究の経過は日本でベジタリアン文化がこれまで浸透してこなかった理由を解明するために、フィールドワーク及びインタビューを通してベジタリアン（ビーガン<sup>2</sup>含む）当事者の経験を尋ねた。研究を始めた当初は「東京ビーガングルメ祭り 2020」「名古屋ビーガングルメ祭り 2020 秋」「京都ビーガングルメ祭り 2020」の 3 つのイベントに参加し、フィールドワークを行う予定だった。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響により、東京・京都のイベントが急遽開催中止になったことから、縮小開催になった「名古屋ビーガングルメ祭り 2020 秋」にのみ参加した。

次に、日本においてフレキシタリアンを増やす実現可能性及びその先で直面しうる課題を解明すべく、ベジタリアンに該当しない層の考え方を重点的に考察した。質的調査では、6 人に対して半構造化インタビューを行い、普段の食事選択に関わる意思決定プロセス及びベジタリアニズムに対する考えを聞いた。量的調査では、20～69 歳の男女 700 人を対象とするパネル型インターネット調査を行い、ベジタリアン・ビーガンに該当しない日本人が動物性食品を避ける・減らすライフスタイルに対する考え方について考察した。

## 第 2 節 先行研究と仮説構築

### 2.1 定義

ベジタリアンには様々な種類があるため、本文を論じる前に予めベジタリアンを定義してから論を進める。

本稿では図 1 のように便宜上、まず「ベジタリアン当事者」及び「ベジタリアン非当事者」に分ける。更に、「ベジタリアン当事者」を「ベジタリアン」及び「ビーガン」から構成されるカテゴリーとし、「ベジタリアン非当事者」を「フレキシタリアン」及び上記以外のライフスタイルを送る人から構成されるカテゴリーとする。なお、上記の「ベジタリアン当事者」は基本的に動物の肉や魚を摂取しないライフスタイルを送る人とし、「ベジタリアン非当事者」は日常的に肉や魚を食べる食生活を送る人とする。

ベジタリアン当事者を細分化して定義づける。本項で用いる「ベジタリアン」の定義を「ベジタリアニズムの実践者。意識して動物性食品の摂取を抑制しようとする思想と実践」（田上 2006）とし、「ビーガン」を便宜上ベジタリアンと同様な定義で扱う。

同様に、ベジタリアン非当事者を細分化して定義づける。海外では「フレキシタリアン」を「主にベジタリアンの食事をするが、肉や魚を時折取り入れることもある人」を指す（Derbyshire, E. J 2017）。しかし、日本において「フレキシタリアン」の定義にあたっては通説がないため、食に関する情報を取り扱う株式会社フレンバシーに定義された「週一日以上、動物性食品を減らすライフスタイルを送る人」とする。なお、上記のいずれのカテゴリーに属されない人、つまり普段の食事で「肉を食べるか否か」を意識しない人を「上記以外」とする。

<sup>2</sup> ビーガン：肉や魚に加え、乳製品や卵などの動物性食品も摂取しない完全菜食主義者。

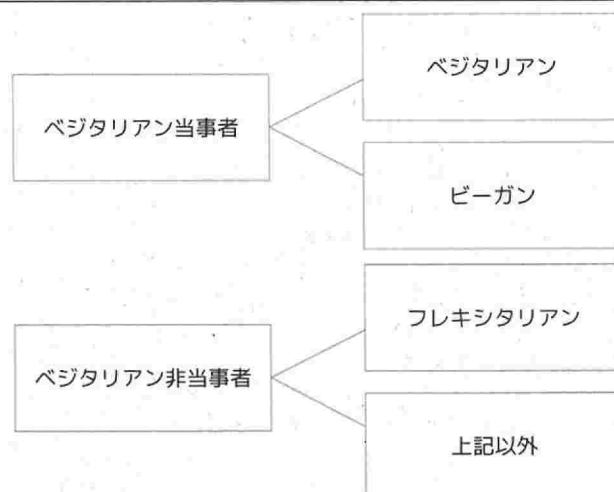


図1 本稿で取り扱う「ベジタリアン」に関わる定義

## 2.2 日本でベジタリアニズムが浸透してこなかった理由を模索した先行研究

現在、日本のベジタリアン率を示す正確な統計は未だ存在していない。一般調査会社のWEBモニターを使ったインターネット調査のデータとして、2014年にNPO法人アニマルライツセンターの調査結果では、日本人のベジタリアン率（ビーガン含む）は4.7%と発表されている。また、ベジタリアン向けの情報を多く取り扱うサービス企業である株式会社フレンバシーが行った「第2回日本のベジタリアン・ヴィーガン・フレキシタリアン人口調査」（2019）では、ベジタリアン率（ビーガン含む）は5.7%という結果であった。

しかし、上記2つの調査はいずれもインターネットで行われた調査であるため、日本全体から無作為に抽出されたサンプルではない。そのため、その結果を基に、日本人全体の中での比率を統計的に推測を行うのはかなり無理がある。他方、日本で外食をする場面を想起すると、ベジタリアン対応の店・食堂が非常に少なく、日本でベジタリアニズムがメインストリーム文化でないことは明らかだろう。

なぜ、ベジタリアン文化は日本で浸透していないのだろうか。角田（2011）によると、日本では「バランス良く食べる」という食育思想の影響が強いことが挙げられる。具体的には、平成17年、厚生労働省・農林水産省により共同で策定された「食事バランスガイド」においては、野菜及び主食の米に加え、第2次世界大戦後まで日本人があまり摂取してこなかった肉、卵、乳製品を一定量食べることが望ましいとされている。このような「バランス良く食べる」ことが健康に良いとする食育思想が、日本的な「食の常識」の形成に繋がったと考えるのが妥当である。

更に、日本には「近親者が日本的な食の常識に基づき善意の干渉をすることによって、ベジタリアン自身が食の常識に合わせてしまうという傾向」が見られるため、日本でベジタリアンとして生活することが、様々な障壁に直面することは容易に想像できる。

## 2.3 仮説構築

先行研究を踏まえた上で、我々は次の3つの仮説を立て、質的調査及び量的調査を通してこれを検証し、研究目的の達成を目指すことにした。

- （ア）環境保護、動物愛護、健康志向といった価値観が動物性食品を避ける行動にプラスの効果を持つ。
- （イ）日本ではベジタリアニズムに対する否定的な印象を持つ人が多く、「菜食主義は健康にとって



栄養バランスが悪い」という考え方がある。

(ウ) ベジタリアニズムと SDGs (温室効果ガスの削減など) の関係性を理解している日本人が少ない。

### 第3節 質的調査結果①：名古屋ビーガングルメ祭り

#### 3.1 フィールドワーク

本項では10月18日に開催された「ビーガングルメ祭り 2020 秋@名古屋」で行ったフィールドワーク、並びにベジタリアン当事者を対象に行ったインタビューを説明する。我々はビーガン料理の特徴、そしてグルメ祭り参加者の属性を明らかにすることを目的とし、インタビュー・参与観察などの手法により情報収集を行った。

グルメ祭りは新型コロナウイルス感染症の影響により縮小開催となり、オフィシャルサイトの発表によると、来場者数は約2500人だった。当日はおよそ30店舗の店が出店し、提供されたビーガン料理のバリエーションも多く、大豆を使用して作られた串焼き・唐揚げ・カレーライスから、動物性不使用のスイーツまで多種多様な物が販売されていた。中には人気のあまりに数十人の行列が出来た店舗、更には番号札を配布していた店舗まで存在したが、閑散としていた店舗も一部あった。また、飲食の他に靴下など動物性不使用の日用品も販売されていた。

グルメ祭りの来場者の年齢層は幅広く、また日本語を話していなかったことから、外国人だと思われる来場者が多い印象を受けた。更に、我々の声かけ及び後日のテレビ報道<sup>3</sup>から、ビーガン、ベジタリアン当事者以外にも、非当事者が多数来場していたことが分かった。



図2 大豆ミート串焼き



図3 ビーガングルメ祭りの様子

#### 3.2 ベジタリアン当事者へのインフォーマルインタビュー

以下では二人のビーガンの方にインタビューのご協力を頂いた。両者とも以前は肉・魚を食べていたのだが、後述する理由でビーガンになったと答えていた。一人目は、子供二人を連れて大阪から名古屋に観光がてら、ビーガングルメ祭りに参加したと答えてくれた女性（以降「甲」と称する）である。二人目は、家畜に対する非人道的な取り扱いに抗議する NPO 団体である「Anonymous for the Voiceless」のボランティアとして、ビーガングルメ祭り会場の入り口で啓発活動を行っていた女性だ（以降「乙」と称する）。

以下では、前述の二人へのインタビュー調査で明らかになったことを述べる。

<sup>3</sup>グルメ祭りのオフィシャルサイトを参照. <https://vegefes.com/recipe/reportnagoyaveganfes2020autumn/>

甲・乙へのインタビューを通して、動物性食品を避ける行動及びその価値観の関係が、以下の計三つで観察された。

まず、一つ目は、両者とも動物愛護に強く関心を持っており、それが最大の理由となって動物性食品を避けようとしたということだ。

甲は、子供の頃からずっと家畜を食べることに対して違和感を覚えていたという。しかし、その違和感が抑えられないほど巨大な物となり動物を一切食べないと決心した契機は、馬肉を食べた翌日に生きている馬に懷かれ、罪悪感を感じたことだったそうだ。

それと同じように、乙は Youtube で家畜が残酷な扱いを受けている様子を描写する動画を見たことがきっかけで、動物福祉に目を向けるようになり、家畜を食べなくなったそうである。また、乙が動物福祉への関心と呼びかけ始めたのは、動物の命を人間と同様に平等に扱うべきだとの考え方が基となった、いわゆる「種差別」<sup>4</sup>に反対するためだという。

なお、乙は当時、非人道的な扱いをされている家畜のみ食べないように心掛けていたというが、漁業の存在が海洋に大きな問題をもたらしていることを知り、魚介類の消費も徐々に減らすように努め始めたという。

また、二人が所属するコミュニティのメンバーの中ではベジタリアンになる理由が様々であった。例えば、甲の知人は自身の体・性格を清らかなものにしたいとの理由でベジタリアンになった。また、その知人は肉を食べると、性格が凶暴になることを実感し、ベジタリアンになることを決心したそうだ。

その他、環境保護のためだという理由も挙げられた。例えば、以前から環境保護のために肉を消費しないようにしていたが、まだ魚は食べていたメンバーである。そのメンバーは、ベジタリアンに関する情報収集を行なっていくうちに、海洋プラスチック問題が大きく漁業に起因することを知り、魚介類の消費を徐々に減らし、今はもう食べなくなったそうだ。

二つ目は、ベジタリアンになったことが彼女らの人間関係に与えた影響だ。

例えば、乙はベジタリアンになって以来、飲み会・会食に参加しづらくなったという。その理由は、周囲の人々に自分の食習慣に付き合わせたくないという思いのみならず、周囲の人からも食習慣の違いで気遣われ、誘われないようになったと感じているそうだ。

また、乙はベジタリアンとして生活する上で、家族及び友達から栄養バランスの面で心配されたり、思想が偏っていると思われることが多くなったという。日々の食事から栄養を気にしながら摂取するよう心がけているにも関わらず、周囲からの心配を解消すべく何度も説明しなければならないことに対して、時折億劫になったり心が疲れたりしてしまうとも言っていた。

三つ目は、ベジタリアンのコミュニティにおいて、情報の交換が盛んに行われているものの、メインストリームの日本社会がベジタリアンを認知しきれていないことだ。

例えば、甲も乙も複数のコミュニティに入っており、そのコミュニティ内では日々、ベジタリアン・ビーガン対応の店や、ビーガン料理のレシピ、更にはビーガン食材を手に入れる方法などの情報が盛んに交換されている。また、料理以外のことでも、菜食主義と感染症の関連、菜食主義の歴史などのトピックまでの幅広い話題が、ベジタリアンのコミュニティではよく議論されているそうだ。

しかし、彼女らは同時に、日本ではベジタリアニズムに対しての多面的な理解が未だに進んでいないように感じられるとも言っていた。コンビニエンスストアで大豆ミートの商品が置かれるようになったことなどにより、ベジタリアニズムという言葉の認知度は近年高まりつつある。ところが、ベジ

<sup>4</sup> 種差別とは、人種差別などにならって作られた用語で、ヒトのみを特権づけ他の生物をないがしろにする差別は不当とする考え方（参照：Wikipedia「種差別」）。



タリアン当事者の経験談、及びベジタリアニズムが世界で如何なる変貌を遂げてきたかなど、ベジタリアン非当事者からするとあまり馴染みのないトピックになると、殆どの人が興味を示そうともしないようだ。

このことにより、ベジタリアニズムに関する情報を発信する意欲を持つ人が減少し、ベジタリアンのコミュニティ内と外部との対話が少なくなったことが分かる。その結果、日本の主流社会では未だにベジタリアニズムに対する認知度が低い状態が続いているのである。

## 第 4 節 質的調査結果②：ベジタリアン非当事者へのインタビュー

### 4.1 インタビューの概要

本項ではベジタリアン非当事者を対象としたインタビューを紹介する。インタビューの協力者は 6 名 (A～F) である。6 名の協力者へのインタビュー実施場所、インタビュー時期などを表 1 に表した。また、インタビュー対象者は以下の 3 つの基準に合致する者とした。

- ①日本で長年生活している日本人
- ②ベジタリアンまたはビーガンに該当しない
- ③日々の食事選択を自分の意思に基づき決定しており、食堂などを利用していない。

この基準で協力者を探した結果、協力者全員がフルタイムで働く会社員となった。

インタビューは、半構造化インタビューを 35 分から 40 分の長さで実施した。方法はコロナウイルスの感染防止対策として、オンライン会議システム「Zoom」を使用し、協力者の同意の上、録音・録画も行った。インタビューの実施にあたって、協力者には、調査の目的が食習慣・食生活の変容過程を解明するためのものであることを事前に伝えた。

表 1 インタビュー調査実施協力者一覧 (実施日時順)

	年齢	性別	備考	実施日時
A	20 代	女性	会社員；「ベジタリアン」に関する知識を有する	2020 年 9 月 26 日
B	30 代	男性	会社員；「ベジタリアン」に関する知識を有する	2020 年 9 月 26 日
C	20 代	女性	会社員；ニュージーランド留学経験者；「ベジタリアン」に関する知識を有する	2020 年 10 月 3 日
D	20 代	女性	会社員	2020 年 10 月 4 日
E	20 代	男性	会社員	2020 年 10 月 20 日

### 4.2 インタビューの結果

本項では、上記のインタビューの結果を報告する。以下、報告すべき内容を考察する。

まず、ベジタリアンに関する知識を十分に有しているか否かにより、「フレキシタリアン」に対する態度が異なることが観察された。具体的には、全ての協力者の中で最も菜食主義に対して好意的で、ベジタリアンになる抵抗感が少ないと認識している C が挙げられる。C は留学先のベジタリアンの知人から、個々人の食事選択が環境に多大な影響を及ぼすことを聞き、自ら数週間フレキシタリアン、及びベジタリアンのライフスタイルも実行した経験を持つ。

C は、留学前に環境と食事選択との関連には全くの無知で、ベジタリアンになるメリットを自分自身の健康に望ましいからだ捉えていたようだ。しかし、友人からベジタリアンの話を聞いた結果、菜食主義に対して好意を持つようになったそうである。

また、A と B は周りにベジタリアンの知人がいることが契機となり、初めてベジタリアンのライフスタイルを更に深く理解する機会が得られたという。A と B は C と同様に、ベジタリアンを更に理解しうる契機があったことから、ベジタリアンに対して好意的になったと話していた。今後ベジタリアンになるかどうか意向を伺ったところ、動物性食品を既に減らしている、そして今後減らしていきたいと語った。

一方、D と E はベジタリアン・フレキシタリアンとして生活することに消極的な態度を示した。D と E は、ベジタリアンという言葉の意味を何と無くは理解しているものの、ベジタリアンになるメリットを挙げてもらったところ、結局環境保護に関連するメリットには触れないままインタビューが終了した。

次に、ベジタリアニズムが自身と無関係であると考えることが、ベジタリアン料理を試すことに消極的であることに繋がるということが調査から伺えた。動物性食品を減らすライフスタイルに消極的な D と E の事例を取り上げると、「ベジタリアン」に対する印象が聞かれた際に、D は「野菜を食べている人。別に私に何か影響があるわけではないから、そういう人もいるよねと思う」と答え、E は「丁寧な暮らしをされてはる方、日本人ではなく外国人のイメージ」と答えた。このことから、二人ともベジタリアンを自身とは異なる存在として考えており、それ故ベジタリアニズムには無意識的に距離を置いていることが分かった。

他方、ベジタリアン料理について、D と E は異なる態度を示した。D は仮にスーパーマーケットで肉・魚を使用せずに作られたお弁当を見かけたら、「ベジタリアン向けだ」と書いていたら、私ベジタリアンじゃないしって思うから、買わない」と話したが、「一般人向けだったら、野菜を食べたい時は買うかも」と答えた。このことから、D はベジタリアン料理が自身と無関係だと考えてはいるものの、ベジタリアン料理を食べることは野菜を多く摂取できるということだと認識しており、野菜摂取のニーズが出てきたら、D もベジタリアン料理を試してみたいと考える可能性があると推測できる。その一方、E はベジタリアン料理のお店を発見したら、それを友人との会話で話題にする可能性はあるが、実際に自ら足を運んで行ってみようとは思わないと答えていた。

## 第 5 節 量的調査：非当事者へのインターネット調査

第 5 節では、量的調査の目的、手法、とその分析結果を記述する。量的調査の目的は、「フレキシタリアン運動」の実現可能性及びその課題を検討するための通過点として、ベジタリアン・ビーガンに該当しない日本人が動物性食品を避ける・減らすライフスタイルに対する考え方を解明することである。そこで、質的調査では補填することが難しい幅広い層の声を収集するべく、以下のようなパネル型インターネット調査を行った。

## 5.1.データの説明

本項では、パネル型インターネット調査の概要及びそのサンプル割付方法について説明する。インターネット調査は、全国で450万人のアンケートモニターを保有するセルフ型アンケートツールを利用した。調査の対象は、ベジタリアン・ビーガンに該当しない層のため、まずは2000人（20代～60代の男女それぞれ200人）のモニターからスクリーニングし、肉または魚を食べる1693人のモニターリストを作成し、本調査を配信した。男女・年代別でそれぞれが70人になると回収を打ち切り、合計700人サンプルを回収した。このように、性別・年代で均等で割り当てたが、インターネット調査の特性上、サンプルの偏りがあることが留意すべき点である。また、モニターの性別、年齢、居住地、職業、業種、未婚、子供の有無、居住形態、世帯年収という9つの属性がモニター情報として登録されていたので、これらの情報は分析に投入した。アンケート（本調査）の概要は下記に記した通りである。

- ・ アンケート名 食生活とライフスタイルに関するアンケート
- ・ 調査対象 日本全国の20～69歳の男女（2020年10月時点）
- ・ サンプルサイズ 有効回収数：700
- ・ 調査方法 インターネット調査
- ・ モニター抽出方法 20～60代の男女年代別均等に割付（それぞれ70人）

アンケートの設問はすべて回答必須で、下記のように選択式10問、記述式2問を設定した。（設問項目と結果の詳細は付録を参考）

- ①最終学歴（中学校～大学院卒までの5択）
- ②ベジタリアンに対する印象（4択、以下は「ベジ印象」と略す）
- ③ベジタリアンに対する興味・関心（4択、以下は「ベジ関心」と略す）
- ④地球温暖化に対する関心（4択、以下は「環境関心」と略す）
- ⑤肉と野菜の生産で出る二酸化炭素ガスの違いに関する知識（4択）
- ⑥日常生活でエコ行動をしているかどうか（5択、以下は「エコ行動」と略す）
- ⑦-1 あなたが考える、肉や魚を意識的に減らす食生活が健康に対する影響（4択、以下は「肉を減らすと健康」と略す）
- ⑦-2 あなたが考える、植物性食品を中心とした食生活が健康に対する影響（4択、以下は「植物中心と健康」と略す）
- ⑦-3 あなたが考える、肉や魚を全く消費しない食生活が健康に対する影響（4択、以下は「完全菜食と健康」と略す）
- ⑧ベジタリアン料理の味に対する印象（4択、以下は「味印象」と略す）
- ⑨ベジタリアン料理の値段に対する印象（4択、以下は「値段印象」と略す）
- ⑩ベジタリアン料理について、思い浮かぶキーワード（記述式）
- ⑪肉や魚を食べない食生活に取り組むとしたら、どのくらいの頻度までできるか（5択、以下は「肉を減らせる頻度」と略す）
- ⑫第⑪問の選択肢を選んだ理由（記述式）

## 5.2 アンケートの集計結果

本項では、仮説の検証に関わる設問項目の集計結果及びその解釈を記載する。仮説検証に関わる設問項目以外の集計結果は本項で割愛するが、付録に記載する。

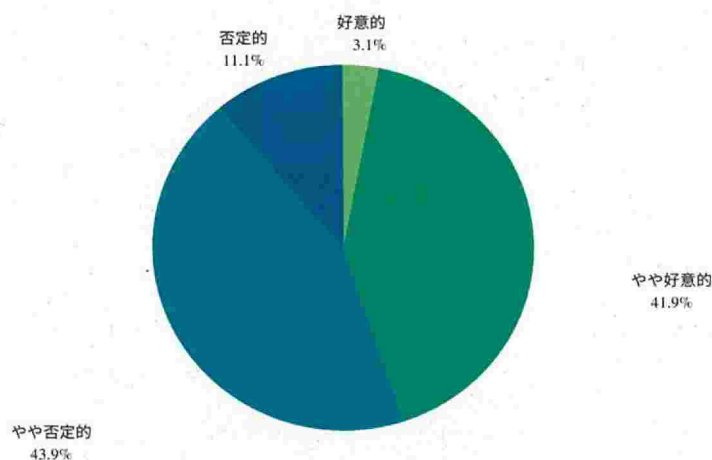


図4 「②ベジタリアンに対する印象」の集計結果

ベジタリアンに対する印象について、「好意的・やや好意的」と答えた回答者と「やや否定的・否定的」と答えた回答者はそれぞれ半分近く存在し、我々が予想していた結果よりも「好意的」「やや好意的」の回答が多い割合になった。

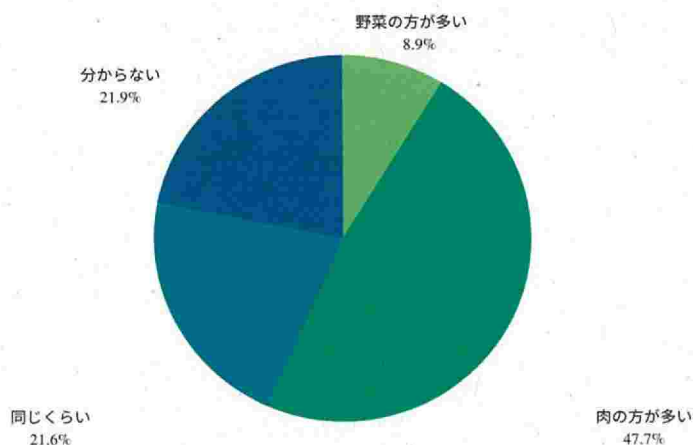


図5 ⑤肉と野菜の生産で出る二酸化炭素ガスの違いに関する知識の集計結果

肉及び野菜の生産で排出される二酸化炭素ガスの違いに関する知識を問う設問では、正解の「肉の方が多い」を選択した人が47.7%を占めた。我々が予想していたよりも意外に高い割合だが、インターネット調査の特性を加味すると、このことが一般的に広く認知されているとは言い難いであろう。

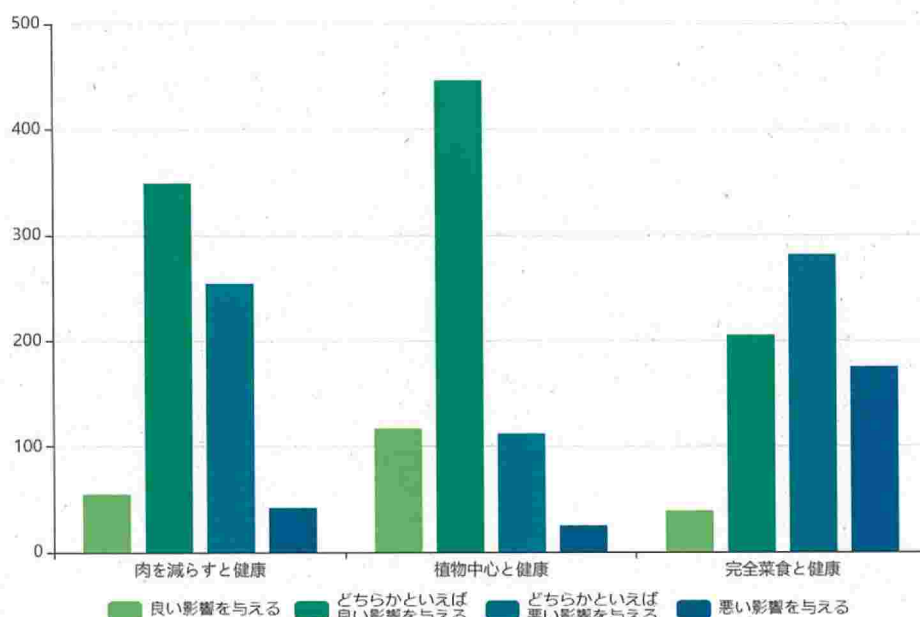


図6 ⑦ベジタリアニズムと健康に関するマトリックス設問の集計結果

設問項目は左から順に記述する。

⑦-1「肉を減らすと健康」：あなたが考える、肉や魚を意識的に減らす食生活が健康に対する影響

⑦-2「植物中心と健康」：あなたが考える、植物性食品を中心とした食生活が健康に対する影響

⑦-3「完全菜食と健康」：あなたが考える、肉や魚を全く消費しない食生活が健康に対する影響

この設問を設けたのは、動物性食品を減らす度合いによって、ベジタリアニズムが健康に与える影響に対する考え方が変わるかどうかを見るためである。そのため質問文は、7-1、7-2、7-3の順に動物性食品を減らす度合いが高くなるように作成し、7-1,7-2,7-3の順に肯定的な回答が少なく、否定的な回答が多くなるのではないかと予想した。しかし結果では、7-2の「植物中心と健康」に最も肯定的な回答が多いことが明らかになった。その原因については、7-1の質問文である「肉や魚などの動物性食品を意識的に減らす」に、減らす度合いを明確に示していなかったことが考えられる。その結果、「植物性食品を中心とした食生活」よりも、「肉や魚などの動物性食品を意識的に減らす食生活」のほうが栄養バランスに欠ける印象を回答者に与えたと思われる。

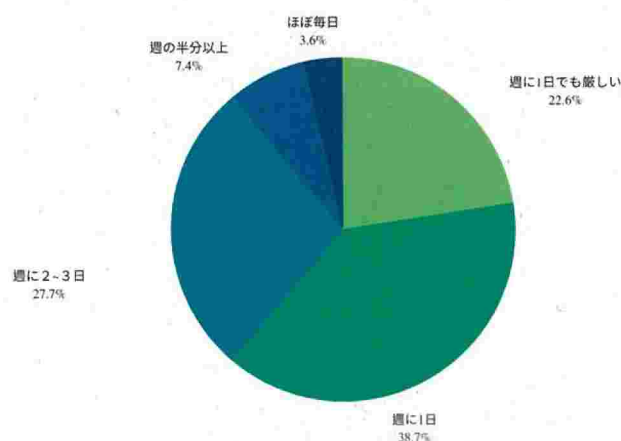


図7 ⑪肉を減らせる頻度の集計結果



今回の量的調査で、回答者の行動変容、言い換えればフレキシタリアンになる可能性を問う設問項目が⑪「肉を減らせる頻度」であり、フレキシタリアン運動を検討する上での重要なデータとなり得る。集計結果を見ると、肉やお魚を食べない食生活に取り組めると考える人が77%にも及んでいる。しかし、週に半分以上の日で肉や魚を食べなくてもいいと答えた人は11%とわずか1割に過ぎない。このことから、日本の場合、週の半分以上動物性食品を減らすライフスタイルは広がりにくいと考えられるが、週に1日のペースで動物性食品を減らす「ゆるいフレキシタリアンスタイル」の方が浸透しやすいのではないだろうか。

### 5.3 自由回答のテキストマイニング

記述式設問のテキストデータについては、700人分のデータを集めた。このデータを計量テキスト分析ツールであるフリーソフト KH Coder 3 による分析を行った。KH Coder では、テキストから頻出語を確認した上で、それらの語の共起関係<sup>5</sup>を探ることが出来る。本項では⑩「ベジタリアン料理について、思い浮かぶキーワード」の回答を分析し、「共起ネットワーク」のコマンドを用い、表したものが図7である。共起ネットワークでは、出現数による語の取捨選択での最小出現数は10、描画する共起関係は上位50とした。

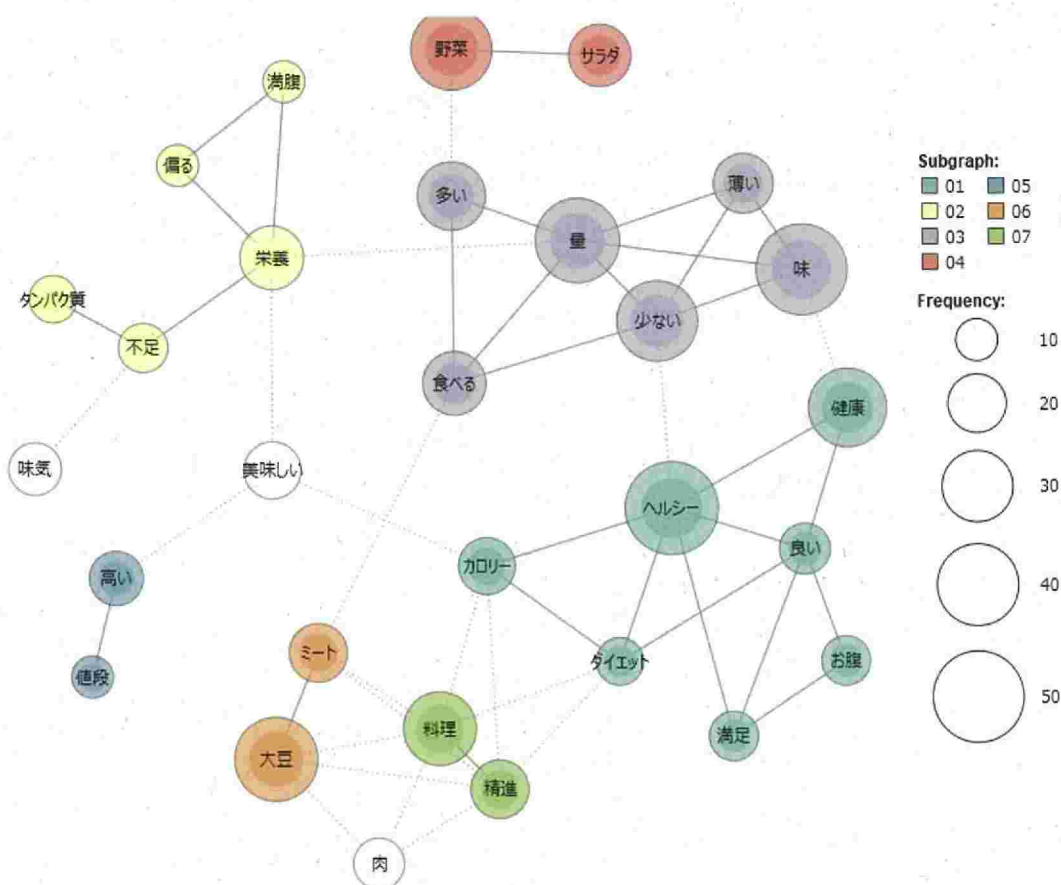


図7「ベジタリアン料理」で思い浮かぶキーワードの共起ネットワーク

<sup>5</sup> 一人の人の回答の中にある文字列とある文字列が同時に出現すること。



この図では、個々の円が単語を表し、その単語の出現回数が増えると円が大きくなる。それぞれの円を結ぶ線は語と語の関係を表し、共起関係が強いほど線が太くなる。

注目すべきポイントとしては、ベジタリアン料理に対して、ネガティブな単語による共起関係を多数確認したことである。例えば、「味」と「薄い」、「栄養」と「偏る」、「不足」、「値段」と「高い」のようなネガティブな共起関係がやや目立つ。また、左の真ん中に「美味しい」の円があるが、KH Coderでは、特別指定しなければ肯定語も否定語も区別しない。そこでこの「美味しい」の使用例を確認したところ、殆どが「美味しくない」または「美味しくなさそう」であった。同様に「満足」の使用例を確認したところ、殆どが「満足できない」または「満足感がなさそう」であった。更に、ベジタリアン料理はバリエーションに富むにも関わらず、多くの回答者は「野菜」と「サラダ」や「大豆ミート」「精進料理」とやや限定的な種類しか思い浮かべないことが分かった。ベジタリアン料理に対して、「ヘルシー」や「健康的」というキーワード以外に、総じてネガティブで偏った共起関係が多いことが伺える。

#### 5.4 定量分析の方法

本項は、アンケートで得られた量的データの定量分析を説明する。分析の目的は、どのような属性・考え方を持つ人が動物性食品を減らすライフスタイル（フレキシタリアン）に対して積極的で、どのような属性・考え方を持つ人が消極的なのかを解明することとする。よって従属変数は行動を問う設問項目⑪「肉を減らせる頻度」の回答にした。独立変数はアンケートモニターの属性情報である性別、年齢、世帯年収に加え、①最終学歴（大卒以上かどうか）と考え方を示す設問②～⑨の回答とする。

分析の流れは以下の通りである。まず、従属変数と独立変数の中に属性情報に該当する性別、年齢、世帯年収、最終学歴の重回帰分析を行った結果、属性が従属変数に有意な効果がないことがわかった（表2を参照）。また、居住地、職業、業種、未婚、子供の有無、居住形態などの独立変数を投入しても、同様に従属変数に有意な効果が無いことがわかった。そこで、独立変数に考え方を問う設問②～⑨の回答を投入し、因子分析とパス解析を通じて、考え方が従属変数に持つ効果を検討する。

表2 肉を減らせる頻度と属性についての重回帰分析

独立変数	相関係数	標準化偏回帰係数
性別	.006 n. s.	.065 n. s.
年齢	.062 n. s.	-.006 n. s.
学歴	-.018 n. s.	.003 n. s.
世帯収入	-.015 n. s.	-.017 n. s.

(n=700 R<sup>2</sup>=.005)

注：n. s. p>.05

#### 5.5 因子分析

前述した通り、属性変数が従属変数に有意な直接効果を持たないことが明らかになったため、ここからは価値観や考え方が従属変数に持つ効果を検討する。考え方を問う設問は②から⑨まで多数あるため、それを要約し、潜んでいる数少ない潜在変数を明らかにするために、因子分析を行った。因子分析には多様な因子抽出法と回転法が提案されているが、種々試みた結果、最尤法と斜交回転（プロマックス回転）を採用した。

因子分析で共通性が低い項目を落とし、「環境関心」「エコ行動」「ベジ印象」「ベジ関心」「肉を減らすと健康」「完全菜食と健康」「植物中心と健康」という 7 つの変数を反転して投入した。その結果、この 7 変数から固有値 2.934 の因子と、固有値 1.294 の因子を 2 つ抽出することができた。第一因子の説明率は 41.91%で、第二因子の説明率は 18.492%である。

表 3 因子の特性

因子	固有値	分散の %	累積 %
1	2.934	41.913	41.913
2	1.294	18.492	60.404
3	.872	12.454	72.858
4	.656	9.376	82.235
5	.533	7.608	89.843
6	.397	5.665	95.508
7	.314	4.492	100.00
合計	7.00	100.00	100.00

表4 共通性

変数名	因子1負荷量	因子2負荷量	共通性
肉を減らすと健康	.812	.298	.659
完全菜食と健康	.734	.073	.586
植物中心と健康	.568	.356	.346
ベジ関心	.557	.471	.390
ベジ印象	.527	.357	.308
環境関心	.296	.863	.746
エコ行動	.195	.509	.260

第一因子は、肉を減らすと健康、完全菜食と健康、植物中心と健康、ベジ印象、ベジ関心の因子負荷量が総てプラスである。「健康」を軸としたものに、ベジタリアンに対する印象・関心が加わっているという内容から、「菜食を取り入れることが健康に良いと考え、菜食主義にポジティブな印象がある」と解釈することができる。よって第一因子を「健康印象因子」と命名する。

第二因子は、環境関心、エコ行動がプラスであるため、「環境に関心があり、エコ意識が高い」と解釈することができる。よって第二因子を「環境エコ因子」と命名する。

第一因子と第二因子の相関係数は 0.375 である。

## 5.6 重回帰分析とパス解析

5.4 で説明したように、社会的属性が従属変数である「肉を減らせる頻度」に有意な効果がなかったことが明らかになっている。しかし、肉をどれほど減らせるかという表出的な意見には、何かしらの要因が影響しているはずである。その要因を説明するには、複雑に絡み合った独立変数間の因果構造を解明すべく、パス解析を採用した。パス解析とは、変数間にいくつかの因果関係があることを

仮定し、因果推論を行う統計的な分析手法である。具体的な手法は、独立変数の間について下位の重回帰分析を行うことで、どの独立変数がどの独立変数の影響を受けているのかという因果構造を示すものである。

本項では、回答者の考え方を示す変数が従属変数に持つ効果についての重回帰分析を行った上、パス解析を通じて考え方を示す変数間の因果構造を検討したい。5.5 で発見した健康印象因子、環境エコ因子に加え、ベジタリアン料理に対する味の印象、値段の印象という 2 つの変数を反転してパス解析に投入し、作成したパス解析表は表 3 であり、その構造を図に表したものは図 8 のパス図である。

表 5 肉を減らせる頻度についてのパス解析

	健康印象因子		環境エコ因子		味印象(美味しそう)		値段印象(高そう)		肉を減らせる頻度	
	相関係数	標準偏回帰係数	相関係数	標準偏回帰係数	相関係数	標準偏回帰係数	相関係数	標準偏回帰係数	相関係数	標準偏回帰係数
<i>r</i>	<i>r</i>	<i>β</i>	<i>r</i>	<i>β</i>	<i>r</i>	<i>β</i>	<i>r</i>	<i>β</i>	<i>r</i>	<i>β</i>
性別(女性)	0.045	0.06	0.126 **	0.166 **	0.084 **	0.011	0.029	0.017	0.062	0.029
年齢	-0.026	-0.013	0.151 **	0.181 **	-0.131 **	-0.180 **	-0.050	-0.092 *	0.005	-0.005
学歴	0.025	0.026	0.074	0.127 **	0.003	-0.048	0.09 *	0.073	-0.015	-0.005
世帯年収	0.06	0.066	0.117 **	0.112 **	0.006	-0.051	0.016	-0.016	-0.018	-0.035
健康印象因子					0.512 **	0.360 **	-0.013	-0.098 *	0.2 **	0.053
環境エコ因子					0.457 **	0.334 **	0.155 **	0.191 **	0.21 **	0.112 *
味印象									0.278 **	0.206 **
値段印象									-0.074 *	-0.095 *
調整済み決定係数	$R^2=0.02$		$R^2=0.065**$		$R^2=0.554**$		$R^2=0.031**$		$R^2=0.093**$	

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

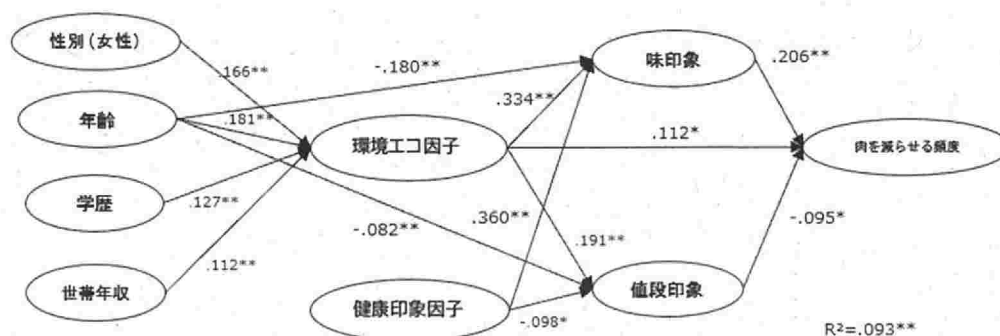


図 8 肉を減らせる頻度についてのパス図

パス図からわかるように、肉を減らせるかどうか、どれほど減らせるかを決めるのは、ベジタリアン料理が美味しく思うこと、値段が高くないと思うこと、そして環境にどれほどの関心があることである。具体的な因果構造の分析は次の考察で詳しく述べる。

## 5.7 量的調査結果の考察

今回の量的調査における定量分析の最も顕著な成果は、「環境エコ因子」とその効果、及び規定要因の発見である。

まず環境エコ因子の効果について、パス図からわかるように、環境に関心があり、エコ意識が高い人ほどお肉を減らすことに積極的であり、ベジタリアン料理の味に対して美味しい印象を持つ。さらに面白いのは、ベジタリアン料理の値段が高いと思う人ほど肉を減らせることに消極的であるにも関わらず、環境エコ因子が「値段印象」にプラスの効果を持っていることである。要するに、環境に

関心があり、エコ意識が高い人ほど、ベジタリアン料理が高いと思っているにもかかわらず、動物性食品を減らすライフスタイルに積極的であることだ。言い換えれば、環境に関心があり、エコ意識が高い人は、ベジタリアン料理が高くて、菜食生活に取り組んでも良いと考えているのである。

そして環境エコ因子の規定要因について、女性で、年齢が高く、学歴が高く(大卒以上)、世帯年収が高いことが挙げられる。これらの社会的属性は従属変数である肉を減らせる頻度に直接的な効果を持っていないが(5.4 項を参照)、環境エコ因子という媒介変数を介して、間接的な効果を持っていることがわかった。

そのほかの考察として下記のことが挙げられる。年齢という独立変数は、従属変数である肉を減らせる頻度にプラスとマイナスの効果を併せ持つことが明らかになった。具体的に、年齢の高い層は環境エコ因子を通して従属変数に正の効果を持っている。一方で、年齢が味印象変数に顕著なマイナス効果を持っており、味印象変数を介して従属変数に負の効果を持っている。すなわち、年齢が高い層は環境とエコに関心を持っているが、ベジタリアン料理に美味しくない印象を持つため、年齢が肉を減らせるに持つ効果は打ち消されていることになる。

最後に、この定量分析の限界と反省点を記載する。まず、アンケート調査の設計は研究の早い段階で行われた。そのため、後ほどのインタビューでわかった、ベジタリアニズムに取り組む原因となる重要な価値観である「動物愛護」を変数に入れなかったことが反省点である。それから、2020 年 7 月から実施されたビニール袋の有料化をきっかけに、幅広い層がマイバッグを持参するようになったと思われる。この背景の中で、我々がエコ行動の代理変数として「マイバッグを持参すること」を利用したことに妥当性を問い直す必要があると考えられる。

## 第 6 節 考察：フレキシタリアン運動から SGD's 達成へ

まず仮説の検証結果を下記にてまとめる。

(ア) 環境保護、動物愛護、健康志向といった価値観が動物性食品を避ける行動にプラスの効果を持つ：仮説(ア)はインタビューとインターネット調査によって支持された。当事者へのインタビューでは、二人とも動物愛護の観点からベジタリアンになったと話しており、また当事者のコミュニティでは環境保護、健康維持の目的でベジタリアニズムを実践しようというメンバーがいるとのことである。インターネット調査においても、「環境エコ因子」が肉を減らせる頻度に有意な効果を持つことがわかり、環境に関心が高い人が動物性食品を減らすライフスタイルに前向きである。

(イ) 日本ではベジタリアニズムに対する否定的な印象を持つ人が多く、「菜食主義は健康にとって栄養バランスが悪い」という考え方がある：仮説(イ)は概ね支持されたが、5.2 項のアンケート集結果で説明したとおり、動物性食品を減らす度合いによって研究対象者の態度が変わることがわかった。

(ウ) ベジタリアニズムと SDGs (温室効果ガスの削減など) の関係性を理解している日本人が少ない。仮説(ウ)に関して、5.2 項で説明したとおり、ベジタリアニズムと SDGs の関係性を理解している少ないとは言え難いが、広く認知されているとも言にくい結果になった。

次に、本稿の研究の目的を再確認する。日本でベジタリアン文化がこれまで浸透してこなかった理由については、研究結果を踏まえ下記にて回答する：(1) 栄養バランスに対する根強い考え方、家族と周囲の無理解と干渉、(2) ベジタリアン対応の店が少ないなど、ベジタリアニズムを実践するうえで生活面の難しさ、(3) ベジタリアニズム、そしてベジタリアン料理に対する偏った印象の 3 点が

考えられる。

その他の調査結果を踏まえ、日本で「フレキシタリアン運動」の実現可能性については、週に一日動物性食品を減らす「ゆるいフレキシタリアンスタイル」なら、十分可能と考える。その裏付けとして、インターネット調査の結果では、週に一日以上肉やお魚を食べない食生活に取り組めると考える人が 77%にもいたことが挙げられる。実際に、「ミートフリーマンデー (Meat Free Monday、週いちベジ)」という週に一日菜食を実践する活動は日本でも展開しており、その実績から日本でのフレキシタリアン運動の可能性を示唆している。

日本でフレキシタリアニズムを広めるにあたって直面する課題については、何より一般消費者にとって菜食生活を継続しにくいことが考えられる。ベジタリアン対応のレストラン、サービス、商品が現状においてまだ少ないため、週に一日だけでも継続するのに労力がかかってしまう。企業にとっても、近年では既に数多くの一般消費者向けのベジタリアン商品が出回っているが、それが一過性のブームで終わる可能性があるため、継続的に商品・サービスを開発するかどうかは疑問である。

最後に、質的調査及び量的調査の結果を交えながら、更に一步踏み込んだ考察を行う。

一つ目は、社会問題に関心を持つことが、ベジタリアニズムに取り組む、または取り込もうとすることに繋がることである。質的調査で判明した、当事者がベジタリアニズムに取り組む要因となる重要な価値観である「動物愛護 (種差別反対)」、そして量的調査で判明した「環境エコ因子」には、ある共通の構造が存在することが分かる。それは、自分自身の利害を超え、動物の権利及び環境への配慮といった社会問題に関心を持ち、貢献したいと考えるある意味の使命感ともいえる。

二つ目は、ベジタリアニズムよりも、フレキシタリアニズムを推奨した方がより広い支持を見込めることである。なぜなら、ベジタリアニズムに取り組むことには、不自由を強いられることが多いからだ。前述したように、肉や魚を食べないことは人間関係の妨げなど、行動の主体に不自由をもたらすことに繋がる。このような我慢や犠牲、不利益を被ることを前提とした社会貢献活動の提唱は、広い支持を集める上で妨げになると思われる。

そのため、本稿ではベジタリアニズムではなく、より柔軟で制限が少ない菜食主義を推進させる「フレキシタリアン運動」を目指した。日本において完全に肉や魚を食べない生活を送ることは、あまりにも厳格すぎて広い支持を集めることが難しい。しかし、フレキシタリアンのライフスタイルなら気軽に始められ、不自由を最小限にして継続することが可能だと考える。

三つ目は、動物愛護よりも、「SDGs」に訴求した方がフレキシタリアニズムを馴染みのあるものにできることだ。当事者へのインタビューで分かったように、動物愛護や種差別に知識が少なくても関心も薄い人に、動物の福祉という切り口からフレキシタリアニズムを実践してもらうことが難しい。一方で、「SDGs」という概念は徐々に日本全体に認知されつつあり、SDGs とベジタリアニズムの結びつきも理解されやすいものである。ゆえに SDGs を通じて、フレキシタリアニズムに良いイメージを喚起させることが出来ると考える。

更に、社会問題を解決する上で重要な主体である企業に対しても同様のことが言える。フレキシタリアン市場への進出や、ベジタリアニズムに寄与することは、事業機会の創出や企業ブランド力の向上に繋がるチャンスとなり得る。SDGs に取り組む企業が増加する中、フレキシタリアンという切り口で、自社の事業成長に寄与する可能性に投資する企業も増えるのではないだろうか。



## 第 7 節.本稿の貢献と今後の展望

本稿の貢献は、以下の三つが考えられる。一つ目は、徐々に日本で注目を集めるようになった「ベジタリアニズム」についての論文がまだ少ない現状の中で、ベジタリアン非当事者に注目することで、先行研究と異なるアプローチからベジタリアニズムを普及させにくい理由を解明したことである。二つ目は、成長しているベジタリアン市場において進出を考える企業に「ベジタリアン商品を購入しそうな層がどのような特徴を有しているのか」という疑問にその知見を提示したことである。三つ目は、殆どの先行研究では質的分析に重きを置くことに対して、本項では量的分析手法を用いることにより、日本人がベジタリアニズムに対する考え方の実態を定量的に捉えたことである。

今後の展望は以下の通りである。まず、今回の質的調査ではベジタリアン当事者へのインタビューでは 2 名に協力していただいたが、2 名ともベジタリアンになった理由が動物愛護である。環境保護や、健康維持、宗教上の理由からベジタリアンになった当事者の話を直接に伺えなかったことが反省点として挙げられる。次に、量的調査では環境やエコへの関心度が高いことが、「フレキシタリアン」というライフスタイルに有意な効果を持つことがわかった。しかし、考え方と社会的属性、また考え方の間には複雑に絡み合った構造があると考えられるため、それをさらに解明する必要がある。なお、インターネット調査の特性上、サンプルに偏りがあるため、母集団から無作為抽出されたランダムサンプリングによる量的調査が望まれる。最後に、フレキシタリアン運動を推進するにあたって、企業が重要な役割を担うが、今回の研究では企業担当者からの意見を直接に伺えることが出来なかったため、今後の課題とする。

### 参考資料

1. 田上孝一. (2006). 実践の環境倫理学: 肉食・タバコ・クルマ社会へのオルタナティブ. 時潮社.
2. 角田尚子. (2011). ベジタリアンを取り巻く日本の状況: 食育思想と近親者からの干渉. 佛教大学大学院紀要. 社会学研究科篇, 39, 19-36.
3. Gerber, P. J., H. Steinfeld, B. Henderson, A. Mottet, C. Opio, J. Dijkman, A. Falcucci, and G. Tempio. (2013). Tackling climate change through livestock: a global assessment of emissions and mitigation opportunities.
4. Tubiello, F. N., Salvatore, M., Rossi, S., Ferrara, A., Fitton, N., & Smith, P. (2013). The FAOSTAT database of greenhouse gas emissions from agriculture. Environmental Research Letters, 8(1), 015009.
5. 東山友香, 小林弘明. (2016). 菜食主義と完全菜食主義の形成要因—ウェブアンケート調査から—食と緑の科学 第 73 号 Hort Research No. 73, 4-5.
6. Derbyshire, E. J. (2017). Flexitarian diets and health: a review of the evidence-based literature. Frontiers in nutrition, 3, 55.
7. 三村千春. (2017). 食行動の「選択」に関する心理学的検討—ベジタリアンを対象として—. In 日本心理学会大会発表論文集 日本心理学会第 81 回大会 (pp. 2B-024). 公益社団法人日本心理学会.
8. Frembassy. (2019). 第 2 回日本のベジタリアン・ヴィーガン・フレキシタリアン人口調査. <https://vegewel.com/ja/style/vegetarianstatistics2>. (参照: 2020-09-17)



## 9. 観光庁.(2020).飲食事業者等におけるベジタリアン・ヴィーガン対応ガイド.

[https://www.mlit.go.jp/kankocho/news08\\_000326.html](https://www.mlit.go.jp/kankocho/news08_000326.html). (参照: 2020-12-24)

## 付録：アンケート設問項目と集計結果

## 1. スクリーニング（回収期間：2020 年 10 月 09 日 ～ 2020 年 10 月 09 日）

ターゲット：[居住地]全国、[年齢]20 歳以上 69 歳以下、[性別]男女

サンプル数：2000

## Q1 あなたの食生活に最も当てはまる選択肢を選んでください。度数(男性/女性)

ベジタリアン	162(78/84)	8.1%
ビーガン	63(37/26)	3.2%
上記以外	1775(885/890)	88.8%

## Q2 あなたは普段、お肉を食べていますか？ 度数(男性/女性)

はい、食べています	1663(822/841)	93.7%
いいえ、まったく食べません	112(63/49)	6.3%

## Q3 あなたは普段、お魚を食べていますか？ 度数(男性/女性)

はい、食べています	1639(801/838)	92.3%
いいえ、まったく食べません	136(84/52)	7.7%

## 2. 本調査（回収期間：2020 年 10 月 12 日 ～ 2020 年 10 月 12 日）

ターゲット：[モニタリスト]本調査対象モニター

サンプル数：700

## Q1 あなたの最終学歴（または現在通っている学校）を教えてください。度数(男性/女性)

中学校	18(7/11)	2.6%
高校	175(75/100)	25.0%
専門学校・短大・高専	162(51/111)	23.1%
四年制大学	292(176/116)	41.7%
大学院	43(34/9)	6.1%
その他	10(7/3)	1.4%

## Q2 肉や魚を食べないライフスタイル、いわゆる「ベジタリアン」に対して、あなたはどのような印象を持っていますか？ 度数(男性/女性)

好意的	65(39/26)	9.3%
やや好意的	285(130/155)	40.7%
やや否定的	272(129/143)	38.9%

否定的 78(52/26) 11.1%

Q3 肉や魚を食べないライフスタイル、いわゆる「ベジタリアン」に対して、あなたはどのぐらい  
関心・興味を持っていますか？ 度数(男性/女性)

興味・関心を持っている	28(14/14)	4.0%
やや興味・関心を持っている	139(64/75)	19.9%
あまり興味・関心を持っていない	256(120/136)	36.6%
興味・関心を持っていない	277(152/125)	39.6%

Q4 地球温暖化に関して、あなたはどの程度の関心を持っていますか？度数(男性/女性)

興味・関心を持っている	96(48/48)	13.7%
やや興味・関心を持っている	349(160/189)	49.9%
あまり興味・関心を持っていない	159(81/78)	22.7%
興味・関心を持っていない	96(61/35)	13.7%

Q5 「野菜」と「肉」を比較すると、生産するときに二酸化炭素ガスの排出量が多いのは、あなた  
はどちらの方だと思いますか？度数(男性/女性)

野菜の方が多い	62(26/36)	8.9%
肉の方が多い	334(181/153)	47.7%
同じくらい	151(72/79)	21.6%
分からない	153(71/82)	21.9%

Q6 あなたは、日常生活で、エコバックを持ったり、ペットボトルを買わなかったりするようなエコ  
行動をしていますか？度数(男性/女性)

いつも必ずしている	138(47/91)	19.7%
できる限りしている	309(143/166)	44.1%
たまにしている	139(80/59)	19.9%
あまりしていない	60(40/20)	8.6%
まったくしていない	54(40/14)	7.7%

Q7 あなたは、以下の食生活を送ることは、健康にどのような影響を与えますか？

7.1-肉や魚などの動物性食品を意識的に減らす食生活 度数(男性/女性)

良い影響を与える	55(27/28)	7.9%
どちらかといえば良い影響を与える	349(173/176)	49.9%
どちらかといえば悪い影響を与える	254(127/127)	36.3%
悪い影響を与える	42(23/19)	6%

7.2-野菜、果物や大豆製品などの植物性食品を中心とした食生活 度数(男性/女性)

良い影響を与える	117(52/65)	16.7%
どちらかといえば良い影響を与える	446(217/229)	63.7%

どちらかといえば悪い影響を与える	112(65/47)	16.0%
悪い影響を与える	25(16/9)	3.6%

## 7.3-肉や魚などの動物性食品を全く消費しない食生活 度数(男性/女性)

良い影響を与える	39(21/18)	5.6%
どちらかといえば良い影響を与える	205(107/98)	29.3%
どちらかといえば悪い影響を与える	281(128/153)	40.1%
悪い影響を与える	175(94/81)	25.0%

Q8 あなたはベジタリアン料理（肉や魚などが入っていない料理）の味に対してどのような印象を抱いていますか？ 度数(男性/女性)

美味しそう	28(14/14)	4.0%
どちらかといえば美味しそう	166(77/89)	23.7%
どちらかといえば美味しくなさそう	367(173/194)	52.4%
美味しくなさそう	139(86/53)	19.9%

Q9 あなたはベジタリアン料理（肉や魚などが入っていない料理）の値段に対してどのような印象を抱いていますか？ 度数(男性/女性)

高そう	166(81/85)	23.7%
どちらかといえば高そう	331(166/165)	47.3%
どちらかといえば手頃な値段	165(79/86)	23.6%
手頃な値段	38(24/14)	5.4%

Q10 あなたがベジタリアン料理（肉や魚などが入っていない料理）について、思い浮かぶキーワードをできるだけ多く記述してください（例：量が多い、量が少ない）

Q11 仮にあなたが、お肉やお魚を食べない食生活に取り組むとしたら、どのくらいの頻度までできると思いますか？ 度数(男性/女性)

週に1日でも厳しい	158(91/67)	22.6%
週に1日	271(128/143)	38.7%
週に2～3日	194(96/98)	27.7%
週の半分以上	52(22/30)	7.4%
ほぼ毎日	25(13/12)	3.6%

Q12 あなたが11問目でそのように答えた理由を教えてください。（テキスト回答）